

文 献

- 根本順吉, 倉嶋厚, 吉野正敏, 沼田 真, 1959: 季節風, 地人書館, 294 pp.
- 倉嶋 厚, 平沼洋司, 1970: 梅雨前線は寒帯前線か熱帯前線か, 天気, 17, 245-246.
- Kurashima, A., Hiranuma, Y., 1971: Synoptic and climatological study on the upper moist

tongue extending from SOUTHEAST ASIA to EAST ASIA, Water balance of MONSOON ASIA edited by Masatoshi M. Yoshino, University of Tokyo Press, 153-169.

- 気象庁, 1974: 梅雨末期集中豪雨研究報告. 気象庁技術報告, 86, 454 pp.
- (気象庁予報課: 百足虎治)

GARP NEWS

GARP/MONEX Informal meeting の報告

第1回 MONEX 小委員会は昭和50年2月6日に気象庁予報部会議室で開催され, MONEX に参加する方法について討論がなされたが, さらに昭和50年度の気象学会春季大会第3日目の夜, MONEX に関する Informal meeting が開かれ, 約40名の会員が参加した. 討論の主題は日本が MONEX に参加するのにどのような研究や観測が必要かという点にあった. しかし, MONEX の目的が未だ十分に会員に理解されていないことや, ネパールやタイですら余り関心がない実情のもとで, 日本が MONEX に参加する必要性は何かという基本的問題が再討論された. これはすでに天気22巻1号に説明されていることなので説明を省略するが, モンスーンはインドだけの問題ではないという考え方から来ている. たとえば, モンスーンは global circulation の一環であり, インド周辺の Indirect circulation と太平洋の Direct circulation との間に中国大陸が位置している, そこにも梅雨とよばれる雨期が発生していること, あるいは, 南西モンスーンと太平洋の台風活動, MPT が無関係ではないという事実から, 日本の梅雨を MONEX の一環としてとらえることは, 意味のあることと思われる.

具体的に日本が MONEX に参加する案としてつぎの3つの柱が討論たされ.

1. 亜熱帯反流, 海気交換の観測

観測船をインド洋まで派遣することは難かしいが, AMTEX と同様な体制で日本の南方海上を台湾~赤道にかけて観測できるならば, モンスーン期の地上風系と亜熱帯反流の関係を調査できる. また, 水蒸気輸送など境界層の観測は台風の発生機構を知るうえで重要だし, 静止衛星の下での ground truth を得るためにも東大の

白鳳丸だけでなく, 気象庁の観測船の参加が強く期待される, さらに, インド洋を航行する船舶に簡単に依頼することも考えられる.

2. モンスーンと梅雨の解析

現象のスケールによって, 取り扱い方が異なるが, 大きなスケールのものとしては 300~100mb に現われるチベット高気圧や亜熱帯高気圧の解析, 経度によって変わる子午面循環の解析を通してモンスーンと梅雨の関係を明らかにすることがあげられる. 雨という立場からはもっと下層のじょう乱に注目し, 水蒸気輸送の解析が重要となる. また, モンスーンと中緯度偏西風とのエネルギー交換も梅雨期の気候を理解するのに重要な研究項目にあげられる. さらに, インドにおけるモンスーンという直接的な研究テーマとして, ベンガル湾のモンスーン低気圧の解析, インド洋上での大気のじょう乱の解析なども, 大切な研究項目として考えられる.

なお, これらの解析には整理たされ資料がすぐ利用できる体制を作ることの必要性が強く指摘たされた.

3. 数値シミュレーション

チベット高原の役割りを明らかにするために, snow cover や顕熱輸送をいろいろ変えて sensitivity を調べることが提案された.

当面は上記の3つの柱が中心になるであろうが, 時間の関係で十分討論できなかった点があり, MONEX 小委員会で今回の結論をさらに整理し, 8月中旬に第3回 MONEX 勉強会を開催して, さらに具体的な MONEX 参加の計画を討論する予定となった.

(文責 朝倉 正, 田中康夫)